

## 第 63 回医療薬学会公開シンポジウム 開催報告書

実行委員長 松永 民秀

(名古屋市立大学大学院薬学研究科)

平成 28 年 11 月 20 日（日）に名古屋市立大学大学院薬学研究科（名古屋市）にて第 63 回医療薬学会公開シンポジウム（主催：一般社団法人日本医療薬学会、共済：一般社団法人愛知県病院薬剤師会、一般社団法人愛知県薬剤師会、一般社団法人日本薬学生連盟）を開催しました。当日は 90 名の方が参加しました。参加者の内訳は、病院薬剤師 45 名、薬局薬剤師 22 名、大学教員 4 名、薬学生 16 名、その他 3 名でした。

今回初の試みとして、次世代を担う学生らにより構成されている日本薬学生連盟との共催にて行いました。テーマは共催としてふさわしい「期待される薬剤師の役割と若い力」。地域医療で期待される薬剤師として積極的な活動を実施している薬剤師 3 名、若い力を育てる大学教員 1 名、その若い力である学生 3 名の講演を開催しました。

まず、千葉大学医学部附属病院薬剤部教授・薬剤部長の石井伊都子氏の特別講演「院外処方箋での検査値表記と薬学的管理の変化」から始まりました。きっかけは連休中に起こった薬の副作用を当直の薬剤師が発見し、重篤化を回避できたことだそうです。連休中でも発見できる体制・仕組みを構築するため、処方箋に検査値表記をすることとなったということでした。検査値表記の際に特に考慮したのが、医薬品別に表記をすること。それにより、ただ検査値を表記するよりも疑義紹介による処方変更件数が格段に増加したそうです。院外処方箋にも表示することで、地域の薬局との連携を行うことができました。さらに、データベースを作成し普及を図ってらっしゃるとのことでした。

次にシンポジウムとして、知多厚生病院薬剤部長の畔柳敏弥氏から「これからの地域医療における病院と薬剤師の在り方～世界健康半島の実現を目指して～」、はるか薬局の梅村紀匡氏から「コミュニティ（形成）+薬剤師力=薬局（Community Pharmacy）」、愛知学院大学薬学部薬物治療学教授の加藤宏一氏から「医師から見た現在の薬学教育」をご講演いただきました。

最後に学生シンポジウムとして、名城大学薬学部 4 年日本薬学生連携外務統括理事の山崎瑞季氏から「全国の熱い薬剤師に出会って」、名古屋市立大学薬学部 5 年日本薬学生連盟交換留学委員長の古澤香菜氏から「教育が私たちを作る」、東京薬科大学薬学部 3 年日本薬学生連盟会長の北澤裕矢氏から「医療人としての薬剤師」を講演してもらいました。

本シンポジウムの参加者は、地域連携に関する最新の取り組み、そして、学生が彼らの先輩である私たち薬剤師に何を期待しているか、演者たちの熱い思いが伝わったことと思います。今後の地域での活動と実務実習での指導に生かしていただければ幸いです。